



1. 頭脳の輸出
2. 新潟地震のもたらしたものと
3. ベトナムでの土木技術者
4. 歩くことが楽しめる都市を

1. 東大教授、資源調査会副会長、エカフェ洪水防御水資源開発局長などを歴任され、幅広い国際人として著名な安芸峽一博士が、このほどベルリン市立工科大学から招かれ、同校の夏期講座で約半月間、ドイツの若き世代に河川工学を教授されてくるという。

純粋な学問の分野で、海外の名門大学から出張講義のお座敷がかかってきた、というケースは微々たるものに過ぎないと思う。助教授、あるいは講師として海外の大学で教べんを取られている土木出身の若い学者を筆者は何人か知っており、明治以来、一方交通？ に終始していた日本の土木界も、これからは学問の世界での代表者を数多く送り出したいものである。国際競争に打勝てるような人材を育成するのに、現在の大学制度のあり方なども一考を要するのではあるまいか。 [E]

2. 新潟地震が起こってこの6月16日では一周年を迎えようとしている。世間ではこれを楔機として石油タンクの消火のため化学消防(室蘭のタンカー火災でまたもその貧弱ぶりをさらけだしたが)という問題も再認識されたし、今まであまりなかった地震保険というものも登場し、巷に改置されていた諸問題の上にも光が差しのべられつつある。工学的にみた地震被害の原因調査については、数多くの文献が出ている。その一部のリストはたとえば「土と基礎」Vol. 13. No. 2. pp 49 に載っているが、実に多数に上るといってよいであろう。これら報告書の全部に目を通していない筆者は、原因についてははっきりした説明をしかねるが、ざっと半年間にこんなに多くの方々が生かされた努力を別な方面の災害の研究にも注ぎ、それにもとづいて適当な防止策を講ずるなら、今後の日本の災害の姿も変わってくるに違いない。「災害は忘れたころにやってくる」ということわざが繰り返されないためにも……。 [C]

3. 南ベトナムで作業中の日本人土木技術者が、現地のゲリラ部隊に捕えられたが、身分がわかって釈放されたというニュースは、最近の土木技術の海外進出ブームの折柄、一寸考えさせられる問題を提起する。それは第一に、明日にも共産側の手に落ちるかも知れないようなところに、貴重な日本の財貨と技術を投じて土木工事をこなしているという無計画さと、第一に国際的な戦場付近で働く危険に対する無神経さであろう。技術の海外進出は、あくまでも国家的に採算のとれる範囲に止まるべきであり、世界銀行のきわめて慎重な態度を参照するまでもなからう。また、戦場において働く兵隊には、人間は敵か味方かのいずれかであって、「中立国(?)の土木技術者」などは考えられないはずであり、このような危険地域で働くことは、全く無謀というべきであろう。

せっかくの土木技術海外進出も、外国の誤解を招いたり、国民の損失とならないように、その実施に当っては慎重な考慮が必要と思われる。 [S]

4. 都市建設調査会(読売新聞社内)が発足して本年度で6年、同調査会はマスコミの力などを活用してユニークな活動をしてきたことは高く評価されている。

今年の総会の席上には、アメリカのMIT政治学部長で、ジョンソン大統領の大都市問題委員長をつとめられたロバート・ウッド博士(1946年プリンストン大学卒)を招き、大都市問題に関する講演を聞いた。博士は短期間ではあったが日本各地を視察された点を中心に論を進め、公共の土地の取得をもっと強力におしすすめるべきであること、歩くことを楽しめる都市づくりをせよ等、多くの興味ある点を強調された。「偉大な社会」構想の具体案を検討された博士の論調は、ややもすれば忘れがちである。人が楽しく生活できる都市建設への警鐘と聞こえた。 [J]

本年1月から今月まで本欄の執筆を分担したのは下記の各氏です。来月号からは新メンバーとなります。ご期待下さい。

J 青木三郎 編集幹事・日本道路公団 1~5号

C 阿部泰夫 編集委員・東北大学 3, 6号

J 河村忠男 事務局編集課 6号

E 岡本義高 事務局編集課 1~4号, 6号

S 中村正平 編集委員・首都高速道路公団 1~6号

E 西脇威夫 論文集編集幹事・武蔵工大 5号

C 三浦晃 編集委員・東北大学 1, 2, 4, 5号